

03

グラデーションのように
引き出しがたくさん持てたら

浜松を拠点に制作活動をしているイラストレーターの萩結さんに、2021年はどのような1年だったか、また、浜松で活動することについて伺いました。

活動のきっかけ

大学在学時からイラストに興味を持つようになりました。卒業後、浜松に戻った後はアートセンターのレジデンスでの活動や、高校時代の繋がりで年に数回、市内で展示をしていました。現在の制作は自分が本来狙っていたものとは少し違うのですが、一度この描き方で続けてみようと思い2年ほど水彩で描いています。

このまま浜松で

制作活動が思うようにいかず、新しい環境へ移り住むことも考えましたが、浜松に留まりたい気持ちも強くありました。迷っている間にコロナが流行り始め、予定していた展示が全てなくなってしまったので、2020年はひたすらコンペへ応募する日々を送っていました。浜松を拠点に活動する友人の紹介や入選したコンペを通じて仕事の機会を得るうちに、少しづつ浜松内外で活動が繋がって行きました。このまま浜松で制作しながら活動の幅を広げていけるかもしれない、と思うようになりました。



二人展「ふたつの春」



kac niche collection 2021

1年を振り返って

2021年は様々なところから連絡をいただいたので、とりあえずなんでもやってみよう、と活動していました。半数を占めていた浜松での展示は在廊もしていたため、作家さん他、たくさんの方と知り合うきっかけになりました。刺激の多い1年でした。また、自分の絵がどのように存在したいかということを考えた1年でもありました。昨年の最後に展示させていただいた「kac niche collection 2021」は、日常の一部に溶け込んでいて、自分の制作に合っていると感じました。

これから

試行錯誤つつ、その過程でグラデーションのように引き出しがたくさん持てたらいいなと思っています。今まで通り、気になった画材にもいろいろと触れたいです。

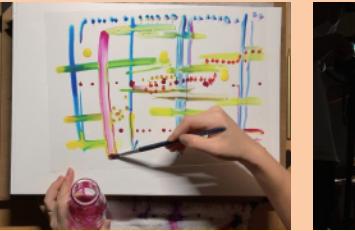


誰かの記憶の片隅にあるような情景を水彩で描いています。本の装画、CDジャケット、名刺などのイラストレーションを描きつつ展示活動をしています。<https://www.musubuagi.com/>

04 様々な物事と響き合う時



アトリエの様子



制作中

ライブペインティング＆パフォーマンス
「色が絵になるとき」(2021/8/29)

一なぜ浜松のアーティスト・イン・レジデンスで制作を?

2019年の冬、長く住み慣れた関東を離れ、夫の地元である浜松に移住しました。コロナの始まりと重なったこともあり、浜松での制作活動の広げ方が見出せずにいた時、夫に提案され、鴨江アートセンターのレジデンスに応募し、2021年の春、私にとって初めてのアーティスト・イン・レジデンス期間が始まりました。東京に比べ浜松は美術展示が少なく刺激不足を感じていましたが、その分出歩かず部屋の中で自分と向き合う時間をじっくりと取ることができたように思います。

一滞在期間の4か月間はどう過ごしましたか?

前半は本を読んでは考え方をし、メモを取る時間に充てました。なぜ私は絵を描くのか? 今回は誰に何を見せるのか? いつも言語化を避けてきた問題と向き合う時間は苦しくも、有意義な時間でした。レジデンス仲間と意見交換をしたり、成果発表に向けてピアニストの方とプログラムを検討し実験を重ねるなどしているうちに、あっという間に成果発表をする8月がやってきました。最後の最後に、「私の絵は、サラダを作るときに似た、即興と遊びの感覚で出来ている」と気づき、成果発表では、絵を描くワクワクを感じてもらえるようなライブペインティングの場を作りました。いつもま



鈴木萌子

1986年千葉県生まれ。創形美術学校イラストレーション・総合学科卒業。卒業後は個展をメインに制作活動をしつつ、2015年より絵描きとしての経験を活かしたアクセサリー・プロダクトの制作を開始。紙・布・アクリルなど様々な支持体に、主にアクリル絵の具を用いて描いています。2021年度前期の鴨江アートセンターでのアーティスト・イン・レジデンスに参加。

05

館長からのメッセージ

アートセンターの“here and now”

この2年間は鴨江アートセンターでも感染症対策で活動を制約されたり変更したりすることが多々ありました。コロナ禍に翻弄されニューノーマルを余儀なくされる中で、アートセンターのバーバス(存在意義)は何だろうという問い合わせを何回も考えました。

コロナ禍で影響を受けたアーティストをサポートしようとしたとき、いちばん近くに存在するのはアートセンターだろうと考えましたが、全国にあるアートセンターの定義は様々で、また存在を準拠する法律もなく、ネットワーク体制もないことにも改めて気付きました。そのことが、アートセンターとは何かを考えるきっかけになりました。

アートセンターと美術館の違いは、アートセンターは、現代に生きるアーティストの活動の場であるという意味から現在進行形“～ing”と言えるのに対して、美術館は、作品が収蔵されたら、その作品は作者の手から離れて社会的存在になるという意味で過去形といいう特性がひとつあると思います。別の言葉で考えると、美術館の“there and then”(かつてそこで)に対してアートセンターは“here and now”(今ここで)が特徴と言えるのではないかでしょうか。

鴨江アートセンターの活動は、毎年公募で集まるアーティスト8名が4カ月間にわたって作品制作に取組むアーティスト・イン・レジデンスと年間50回以上開催されるワークショップやトークイベントなどが中心です。アーティスト・イン・レジデンスでは、制作中のアトリエを開放したり、アーティストのトークやワークショップを開催したりして、それぞれの個性を發揮し、市民との交流が生まれます。滞在期間の最後には、「今ここで」の制作成果を見ていただく成果発表を開催します。また、もうひとつの活動である年間50回以上開催するワークショップやトークイベントなどの市民交流事業では、それぞれの専門分野のファシリテーターの「今」をお届けします。

“here and now”(今ここで)は、同時に機敏性、柔軟という意味を含んでいると思います。「今ここで」現在進行形で動いている間は、アーティストも作品も柔軟に変化することが可能です。アーティスト・イン・レジデンスでは、滞在開始時の計画と成果発表の内容が異なることもあります。4カ月の制作期間中に思いもしなかったメタモルフォーズ(変化・変容)が起こることもあります。それこそが鴨江アートセンターに滞在した成果ではないかと思います。

2013年に開設された鴨江アートセンターは10年目を迎えます。ひとつのマイilestoneとして、今年は改めて“here and now”(今ここで)を感じていただける企画を皆様にお届けしたいと思います。それらを通じてアートセンターのバーバス(存在意義)を皆様に感じていただけるかチャレンジしたいと考えます。

2022年3月 浜松市鴨江アートセンター 館長 村松 厚

